【16】

氏　名(本　籍)	単　援朝(たん　えんちょう)(中　国)
学位の種類	博　士(文　学)
学位記番号	博　甲　第　939　号
学位授与年月日	平成4年3月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	芥川龍之介研究 ——中国文学との関わりを中心に——

主　査	筑波大学教授	文学博士	平	岡	敏	夫
副　査	筑波大学教授		桑	原	博	史
副　査	筑波大学助教授		新	保	邦	寛
副　査	筑波大学教授		利	沢	幸	雄
副　査	筑波大学教授		向	嶋	成	美

論　文　の　要　旨

本論文は，近代日本の代表的な作家の一人であり，かつ大正期のすぐれた短編作家として知られる芥川龍之介について，中国文学との関わりを中心に論じたものである。

まず，序論において，芥川龍之介が大正作家の中で中国及び中国文学と最も深いつながりをもつ一人であるとして，中国の古典に取材した歴史小説，いわゆる中国物や，現代の中国を扱った現代小説を多く書いており，中国文学及び中国が芥川の資質の形成と創作との両面に大きくかかわっていることを指摘した上で，従来の研究が全体的な把握の試みが少なく，概観的な考察にとどまる傾向があったことの反省から出発しようとする。

すなわち，主論文全体を大きく2部構成に分かち，第1部では中国物の創作を中心とする初期を考察の対象として，作品を原典と比較しつつ論及しし，第2部では中期の中国旅行及びそれ以後の文学の展開を考察の対象として，芥川の見た中国の現実の諸相と作家内面の問題を検証し，芥川文学と中国文学及び中国との関わりを究明することで，芥川の人と文学に新たな照明を与えようとするのである。

第1部「初期の芥川龍之介—中国文学と歴史小説」は，序章として「中国文学と歴史小説」を置き，全4章によって構成されている。第1章は「仙人の系譜」と題して，「仙人」(大正5年)「黄粱夢」(大正6年)「杜子春」(大正9年)の三作を検討している。三作とも中国文学に取材しつつ，いずれも仙人を扱っていることから，他の「仙人」と題する作品をも参考にしつつ，「仙人の系譜」とも呼ぶべきものを見出している。3節から成るが，第1節で考察の対象としている「仙人」に関し

ては，先行研究が仙人の設定自体を問題にしていないことを批判しつつ，原典である『聊齋志異』の構成を踏襲しながら，結末で原話に対する反措定の形で，芥川が物語を作り変えて独自の主題を表出したとしている。第2節では「黄粱夢」と唐代の伝奇『枕中記』との比較考察を行っているが，『枕中記』の出処に関し，作品の中の「知制語」という言葉を手がかりに『唐代叢書』や『太平廣記』で読んだ可能性を排除し，『文苑英華』系統の刻本に見て検討を進めているのが注目される。第3節では「杜子春」を先行研究と異なり，仙人への視点から唐の『杜子春伝』との比較を通して綿密な作品分析を行っている。童話として論及されてきた「杜子春」評価に関して，「自ら仙人となることを否定するような，非常識的で人間的な仙人は芥川の独創」とする仙人の相対化の志向を読みとっているのも重要な指摘である。

第2章は「『異端者』の運命」と題して「鼻」（大正5年）「酒虫」（大正6年）「芋粥」（同）を論じている。全3節から成り，第1節では「鼻」を喪失と回復の構造としてとらえており，先行研究の「利己的な人間性に対する諦観」といった傾向に対し，むしろ自我確立への志向という積極的な評価を打ち出している。第2節では「酒虫」を「酒虫は即劉（主人公）」とする見解を，原典の『聊齋志異』との詳細な比較から抽き出し，前作「鼻」も同じく「長鼻は即内供」であったとしている。第3節では「芋粥」を「自我」喪失の旅ととらえ，それを通して「鼻」「酒虫」「芋粥」の三作における人間の存在と「自我」確立への強い関心を見出している。

第3章は「『英雄』と芸術家」と題して，「英雄の器」（大正7年）「地獄変」（同）を取りあげ，3節にわたって二作品を論及しているが，前者については『通俗漢楚軍談』との比較を通して「英雄の器」としての項羽の発見に及び，そこに人間性認識者の芥川を見出し，「地獄変」で再び検証する。数多いこの作品の研究史の中で，『通俗漢楚軍談』や「英雄の器」と関連させたものはなく，芸術家と英雄という視点からの「地獄変」分析も注目すべきものである。第4章は「『主観』と『事実』」と題して，「秋山図」（大正9年）「南京の基督」（同）「奇遇」（大正10年）等を論じている。4節から成るが，評価の高い「秋山図」については，詳細な先行研究をふまえ，原典の「記秋山図始末」と比較しつつ，永遠の美は画家の心中にのみあるとする芥川の認識を導き出しており，「南京の基督」をそこに関連させている。従来無視されてきた「奇遇」を二作品の延長線に位置づけているのも新しい指摘である。

第1部がいわゆる中国物の作品論的研究であったのに対し，第2部「中期の芥川龍之介」は主として芥川の中国旅行にかかわる作家論的研究である。序章「中国旅行前後」で大正10年3月から7月末までの中国旅行とその前後の創作活動を概括したのち，全5章にわたって論及している。第1章は『支那游記』（大正14年）を論じており，4節にわたってこの旅行記の世界を精密に検討しつつ，従来の研究がほとんど無視してきた『支那游記』がいかに芥川研究にとって重要であるかを明かしている。この一巻に「西洋」への拒否と東洋への傾斜という底流を読みとっているのも注目すべきである。

第2章は「上海の龍之介」と題し，4節にわたって，芥川が会見した李人傑に関し，当時の中国の実状を視野に置きつつ，新しい発見を示している。「『若き支那』を代表すべき一人」と芥川が記

しているところから，少年中国学会，その機関誌「少年中国」の調査に及び，ついに李人傑が上海における共産党の代表者であり，芥川はそれを知りながら，当時の検閲を警戒して上記のような表現をとったとするのである。それは会見記事文体の検討（第2節）や実地調査にまで及び，北京で出ていた「日刊新支那」に掲載された芥川の談話記事をも視野に収めている（第4節）。第3章「北京の芥川龍之介」では3節にわたって，北京で会見した胡適，著者によって訂正された高一涵ならぬ辜鴻銘の二文人とのかかわりが論及されている。資料としての胡適の日記は従来言及があるものの，著者は現在中国で刊行されている『胡適の日記』により新たに論じており，第2節で胡適の見た芥川龍之介を提示しつつ，さらにさまざまな角度から検討を加えている。

第4節「中国における芥川龍之介像」は，同時代の視点から3節にわたって芥川を論じたもので，第1節では『支那游記』がわずか1ケ月後に中国訳された事実に注目，訳者夏丏尊を論じて『支那游記』との出会い，上海・内山書店とのかかわりにまで及んでいるのはきわめて興味深い。そこからさらに魯迅訳「鼻」「羅生門」に及び，中国における芥川文学の翻訳・紹介，上海の雑誌「小説月報」の芥川特集まで検討している。

第5章は中国旅行以後の創作活動を「馬の脚」（大正14年）「湖南の扇」（大正15年）の二作品を中心に論じたもので，従来閑却されていたこれら中国を舞台とする両作品を，その成立と方法にわたり具体的に論じている。4節から成るが，第1節では「馬の脚」と『聊斎志異』とを比較しつつ，旅行体験の反映を見出し，第2節ではさらに「馬の脚」を「河童」（昭和2年）につなぎ，家族主義への反発や発狂の問題等，さまざまな角度から論じている。第3節で旅行体験の再現としての「湖南の扇」に論及し，斬首された情人の血のしみたビスケットを食う玉蘭の話から，第4節では「人血饅頭」を論じて芥川の創意を見出している。

審　査　の　要　旨

本論文は，著者の筑波大学大学院博士課程における7年間の総決算であり，このうちのいくつかは雑誌論文のかたちで，すでに発表され，学会で高い評価を受けているが，2部構成による体系化を通して，芥川龍之介と中国文学，さらに中国とのかかわりを，従来の研究にその比を見ないほど周到かつ精密に追求したものである。

第1部は中国文学及び中国が芥川の資質の形成と創作の両面に深くかかわっていることを論じ，芥川文学の初期（著者によれば大正10年ごろまで）における中国物の創作を，先行研究を綿密にふまえつつ，原典との比較と作品分析を通して新しく論じている。「仙人の系譜」の指摘や「英雄の器」と「地獄変」との相関など新見に富むが，もっとも著者の独創を発揮しているのは第2部である。日本国内の文献はもとより，上海や北京で刊行されている中国の文献を駆使し，たとえば上海で会見した李人傑が実は共産党の代表者であり，芥川は発禁を警戒してカモフラージュしたのだとする指摘など，まことに新鮮で芥川の全体像にも及んでくる重要な発見である。また，北京における胡適との出会いに関しても，中国文献にもとづく多角的な考察があり，中期（著者によれば中国旅行

以降）の芥川龍之介を従来の研究をこえて豊かに描き出したものと言えよう。

「馬の脚」と「河童」をつなぐものもはじめての試みであるが，作品と作品との関連や作品自体の分析は，試論の域を出ないものもあり，さらに今後の検討を必要とするし，自殺の年の「河童」が論じられているにせよ，後期の芥川龍之介は，著者自身も本論文の範囲外としているように，やはり今後の課題であろう。

しかし，著者の芥川龍之介研究が今なおその過程にあるとしても，設定した主題に関し，優に現在の研究水準を抜いていることは疑いえない事実として高く評価されるべきである。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。